

バークリの神の存在証明

野村 智清

1. 「アイルランドの哲学的伝統」とバークリ

これまで多くの研究者が指摘してきたように、バークリ哲学の中心には神学的考察がある。このことは『人知原理論』（以下『原理論』）を締めくり、その位置付けを明確にする『原理論』156節の次の言及にも表れている。

結局のところ私たちの研究で第一位に値するのは神と私たちの義務の考察である¹。この考察を促進することが私の労苦の趣旨でありまた意図であった。
（『原理論』156節）

『原理論』156節で、『原理論』は神と神への人間の義務の考察であったとされている。『原理論』がバークリの哲学的主著のひとつであることを考え合わせると、バークリは自らの哲学的営為の中心に神学を位置付けていたと考えることができる。

その中心的な位置付けにもかかわらず、バークリの神学がどのようなものであるのかということが主題的に扱われることは少ない。このことを踏まえて、本稿ではバークリの神学、特にバークリの神の存在証明がそのような特徴をもつのかを明らかにすることを目指す。

具体的には本稿ではバークリと同時代に同じアイルランドで活躍したキングが1709年3月16日にダブリンのクライスト・チャーチで行った『人間の意志の自由と整合する神の予定と予知（*Divine Predestination and Fore-knowledge, consistent with The Freedom of Man's Will*）』（以下『予定と予知』）と題された説教へのバークリの批判からバークリの神の存在証明の特徴を探る。キングは1650年3月1日に現在は北アイルランドに属するアントリムに生まれた。長じて、1666年には特待生としてトリニティ・カレッジ・ダブリンに進む。そしてその後ダブリンのセント・パトリック教会の司教代理を経て、1703年にダブリンの大主教となり1729年に亡くなるまでこの職を務めた。1702年には『悪の起源（*De origine mali*）』を、また1709年には『予定と予知』を出版している。キングはライプニッツ、ベ

イルといった同時代の多くの哲学者たちに大きな影響を与えたとされている²。

同時代の哲学者に大きな影響を与えたキングも現在ではほとんど省みられることがない。いまや忘れ去られてしまったとさえいえるキングの哲学を³、それもあつたひとつの説教に限って採り上げることがバークリの神の存在証明の特徴を明らかにすることにどのように資するのかということは説明を要するだろう。この本稿の内容の限定は、キングも含まれるとされているアイルランドの哲学的伝統とバークリの哲学の結び付きをどのように捉えるべきであるのかという問題と密接なつながりをもっている。

本稿で「アイルランドの哲学的伝統」という言葉が意味しているのは、バークリに先立って、17, 18 世紀に活躍したトーランド、キングあるいはブラウンといった哲学者たちの思索である。例えばバーマンはロック哲学を背景としてトーランドに端を発しバークで終焉を迎える独自性を持った「アイルランドの哲学的伝統」が存在すると考える⁴。17, 18 世紀の「アイルランドの哲学的伝統」は背景とするロック哲学の神学的主題への応用の仕方を基準に「ロック左派」と「ロック右派」に分類される。トーランドが提示した革新的な理神論的立場は「ロック左派」とされ、伝統的なキリスト教の立場を擁護する保守的なキングやブラウンは「ロック右派」とされる。バーマンの見立てに拠れば、三位一体などのキリスト教の教義の一部が神秘であることを容認する点でバークリは「ロック左派」と袂を分かち、キリスト教の教義の全てが神秘ではないとする点で「ロック右派」とも異なるとされる。言い換えれば、バークリは「ロック左派」と「ロック右派」の中間に位置付けられている。

ロック哲学をその背景とすることは、「アイルランドの哲学的伝統」が同時代のイングランドの哲学に依存していたことの証左には必ずしもならないとバーマンは考える。むしろ逆に、トリニティ・カレッジ・ダブリンがロック哲学をヨーロッパの教育機関の中でも最も早く受容したことに「アイルランドの哲学的伝統」の独自性を見出しさえする⁵。このことに加えて、バーマンは「アイルランドの哲学的伝統」の独自性は、「ロック左派」を論駁するためにキングやブラウンといった「ロック右派」が提示した「神学的表象主義」によって特徴付けられるとする。ここで言及されている「神学的表象主義」は、物質についての表象主義的な立場を踏まえて、神の属性について人間には、その本質を理解することはできないが、その結果を理解することはできるとする立場であるとバーマンは規定している⁶。

バークリの神の存在証明の特徴を明らかにするという観点から考えると、バーマンによる「アイルランドの哲学的伝統」の特徴付けはある弱みをもつ。その弱

みとは、その解釈を支えるテキスト上の明確な証拠が示されていないことである。バークリは時代的に先行する「ロック右派」による「ロック左派」への批判を受け入れつつ、「ロック右派」をも批判する中間者として描き出される。しかし、バークリが「神学的表象主義」を奉じる「ロック右派」を批判しているテキスト上の証拠として挙げられるのは『原理論』77節と『アルシフロン (*Alciphron; Or, The Minute Philosopher: In Seven Dialogues*)』第四対話17で「知られざる属性の知られざる支持」という文言が一致しているということのみである⁷。確かに、『原理論』の77節での物質についての表象主義を論駁する際に用いられたのと同じ文言が『アルシフロン』での神の属性を巡る議論でも使用されていることは興味深い。またブラウンやキングとバークリの個人的な交流を考えれば⁸、バークリが特にその神学的思索においてブラウンやキングの影響を被ったことに疑いの余地は殆どない。しかしこの文言の一致が「アイルランドの哲学的伝統」の中にバークリ哲学を位置付けるという大きな思想史的な企てを明確に証拠付けるか否かには疑いの余地が残る。

この弱みに加えて、バーマンの解釈には「アイルランドの哲学的伝統」という捉え方それ自体についての疑義も向けられうる。一般的な文学史の区分に則れば、バーマンによって「アイルランドの哲学的伝統」が存在すると考えられている時期は「アングロ・アイリッシュ文学」の時代である。この時代にはスウィフトを初めとするイングランドからの移民をその祖先に持つアイルランド生まれの作家たちが英語で多様な作品を残している。しかし、これらの作品を「アングロ・アイリッシュ文学」と一括して呼ぶことには疑義が向けられている。

例えばベケットは19世紀の作品はともかく17, 18世紀の作品を「アングロ・アイリッシュ文学」と呼ぶことは危険であるとする⁹。アイルランドは地理的にイングランドに近く相互交流が容易であった。また当時は政治的にもイングランドに依存していた。加えて、決定的なことに文学的名声やそれを通しての収入はダブリンよりもロンドンで得られた。これらの理由からベケットは、バークリの哲学を含めた17, 18世紀の「アングロ・アイリッシュ文学」がその呼称に対応したイングランドに依存しない独自性を持つと解釈することは疑わしいとする。

このように17, 18世紀にそもそもイングランドから独立し、独自性を持ったアイルランドの文化なるものは存在しないとする捉え方は文学史に限られてはいない。バーマンも言及しているが、レアードは1923年にベルファストで行われた講義で更に強い意味を込めて次のように述べている。

私はこの講義を「アルスター哲学 (Ulster Philosophy)」ではなく「アルスターの哲学者たち (Ulster Philosophers)」と呼ぶ。なぜならアルスター哲学は存在しないからである。(Berman (1994), 79)

この発言でレアードが意図したことは、バークリをはじめとしたアイルランド生まれの哲学者は存在するが、イングランドに依存しない独自性をもつ「アイルランドの哲学的伝統」は存在しないということであろう。言い換えれば、「アイルランドの哲学的伝統」を考える場合には、ベケットが文学史において指摘する「アングロ・アイリッシュ文学」という呼称と同様の危険があるとレアードは考える。

「アイルランドの哲学的伝統」が存在するか否かという問題は、バーマンがその独自性の中心として掲げている「神学的表象主義」という特徴付けが、ベケットやレアードにみられる批判に耐えうるものであるか否かにかかっている。また仮に、バーマンの解釈が批判に耐えうるものであったとしても、「アイルランドの哲学的伝統」を踏まえて、バークリの神の存在証明の特徴を明らかにすることを目指す場合にはテキスト上の明確な証拠の少なさという弱みが存在する。

この状況を踏まえると、バークリの神の存在証明の特徴を明らかにするためにまず行うべきことは、テキスト上の明確な証拠に則って「アイルランドの哲学的伝統」に含まれるとされる哲学者とバークリの結び付きを確認することであると考えられる。なぜなら、「アイルランドの哲学的伝統」の独自性についてのバーマンの解釈の当否がいずれであるにせよ、「アイルランドの哲学的伝統」とバークリの哲学の結び付きが明確に示せなければ、バークリの神の存在証明の特徴の理解に資するところ多くはないと考えられるからである。

バーマンがその解釈を支えるテキスト上の明確な証拠を挙げないことは、「アイルランドの哲学的伝統」を含めた先行する哲学者へのバークリ自身の態度にも起因している。政治的な思惑もあってか、特に出版した著作において、バークリは明確に名指しで先行する哲学者を批判することが非常に少ない。このような状況で「アイルランドの哲学的伝統」をバークリがどのように捉えていたのかを示すテキスト上の証拠のひとつとして次のような言及が考えられる。

感覚できない延長があるという人々が居る。壁は白くなく、火は熱くないなどという他の人々も居る。私たちアイルランド人はこれらの真理を獲得することはできない。(『哲学的評註』 392)

出版を意図していなかった『哲学的評註』では、この箇所を含めて三箇所でバークリは自らのことを「アイルランド人」と呼ぶ。このことは例えばスウィフトが自らのことを「アイルランドのイングランド人」と呼ぶことと対照をなしている¹⁰。スウィフトの例と合わせて考えると、独自性を持った「アイルランドの哲学的伝統」が存在するか否かという後代の議論の当否は置くにしても、この言及は自らを含めた「アイルランド人」の考えがその呼称に対応する程度には独自性をもつとバークリが考えていたことの証拠になると考えることができる。

しかしこの解釈にはひとつの疑問が付きまとう。それは独自性を持つと捉えられている「アイルランド人」の考えのバークリによる評価を巡る疑問である。先に引用した箇所にみられるように、独自性を持つとされる「アイルランド人」の考えは常識的なあるいは一般人の考えと同じである。つまり「アイルランド人」という呼称は、バークリが自らの哲学と一致していると誇る哲学以前の常識的な考えを持つ人々という意味で使われているに過ぎないのではないか。このように考えるならば、自らを含めて「アイルランド人」という呼称を用いていることは必ずしもバークリが独自性を持つ「アイルランドの哲学的伝統」の存在を認めていたことを示しはしない。

『哲学的評註』と同様に出版することを意図されなかった書簡においても「アイルランドの哲学的伝統」についての言及がみられる。バークリは1709年あるいは1710年の3月1日付けとされるパーシバル宛書簡で次のように述べている。

私はダブリンの大主教の神の予知に関わる説教の権威を自身の裏づけとして、神に足や手が無いように知恵、善性あるいは知性があることを否定し、それらの事柄は象徴的な意味にとられるべきだという人々と出会いました...<中略>...そして驚いたことに彼〔ダブリンの大主教〕の恩寵がその奇妙な教説を主張していることを発見しました。(Berkeley, vol. 8, 32)

この書簡は「アイルランドの哲学的伝統」とバークリの哲学の結び付きを考える上で非常に重要である。「神の予知に関わる」とされている説教の内容から考えても、この書簡で「ダブリンの大主教」とされているのは、明らかにキングのことである。出版された著作と異なって、バークリはこの書簡でキングを名指しで明確に批判している。

本稿ではバーマンの解釈に向けられうる疑義に鑑み「アイルランドの哲学的伝統」を踏まえてバークリの神の存在証明の特徴を明らかにするために行うべき最

優先の課題をテキスト上の明確な証拠に基づいて「アイルランドの哲学的伝統」とバークリの哲学の結び付きを考えることであるとした。そしてパーシバル宛書簡でのバークリのキングへの名指しの批判というテキスト上の明確な証拠から、考察の内容をキングの説教へのバークリの批判に限定した。

2. 『予定と予知』でのキングの立場

序論でも指摘したように、パーシバル宛書簡でバークリは名指しでキングを批判している。本節ではキングへのバークリの批判の内実を明らかにする準備段階として、『予定と予知』でのキングの立場を概観する。

その題名も示すように、『予定と予知』の目的は神の予定や予知が人間の自由意志と整合することを示すことにある。この目的を果たすために、キングはまず神の本性、属性そして能力について次のように述べている。

神の本性がそれ自身では人間の知性によっては理解できないことは事実上すべての人が同意している。そして神の本性だけではなく、同じように神の能力や能力そして神がそれらを行使する手段や方法は遥かに私たちの理解できる範囲を超え、私たちはそれらの精確で十分な思念を形成することができない。（『予定と予知』3節）

キングに拠れば、神の本性、属性そして能力は「私たちが理解できる範囲を超え」ており「人間の知性によっては理解できない」とされている。「事実上すべての人が同意している」という強い表現からも窺えるように、キングの神学的考察のすべてはこの神の捉え方を前提としている。しかし神の本性、属性そして能力をこのように捉えるとひとつの疑問が生じる。それは聖書の記述を巡る疑問である。聖書では神の属性について、人間の属性を語る際に用いられる言葉と同じ言葉が用いられている。例えば聖書では「神の手」や「神の知恵」という記述が散見される。では神の知恵を全く理解できないのであれば、私たちはこのような記述をどのように捉えればよいのだろうか。キングはこの疑問に対して次のような回答を示す。

私たちが私たち自身に形成する神の、あるいは神の属性の記述は彼〔神〕やそれら〔神の属性〕の端的で直接の知覚に基づいているのではない。しかし

それ〔神の属性の記述〕は彼〔神〕の作品の観察と私たちが同じようなことをおこなうのに必要と思う特質の考察に基づいている。それゆえに偉大な秩序、有用さそして調和を世界のさまざまな部分に観察することやすべてのものが全体の保存と利益のために適合され傾向付けられていることを知覚することは、ものごとを私たちが偉大な知恵無しにこのように素晴らしく適切に工夫し設えることはできないと考えさせる。そして事物を協調させ工夫した神は知恵をもっていると結論付ける。（『予定と予知』4節）

それゆえに私たちの理性は私たち自身の内でもっとも価値があり完全な性質や力能への類似や類比という方法で神にそれらの属性を帰することを教える。（『予定と予知』4節）

キングは疑問への回答として類比という概念を提示する。キングに拠れば、聖書での神の属性の記述は人間の属性を表す言葉を類比として用いることによってなされている。先述したように、神の属性を人間はまったく理解することができない。このように神の属性を捉えると、例えば神の属性 A に「属性 A」と名前を付け、「神は属性 A をもつ」と記述したとしても、人間がその記述を理解することはできない。なぜならそもそも「属性 A」という言葉が指示する神の属性 A について聖書を読む人間はまったく理解することができないからである。そのために聖書では、神の属性が産み出すことがらを人間が行う場合にはどの人間の属性が必要かということに基づき、その必要とされる人間の属性によって神の属性は表されているとキングは考える。このようにキングが類比と呼ぶ仕方で、人間の属性を表す言葉を用いることで、人間は本来まったく理解することができない神の属性のそのものの知識ではないにしても、なんらかの思念をもつことができるようになるとされる。

類比によって得られる神の属性についての思念は単に人間に神の属性についてのある種の知識をあたえるだけではない。類比によって得られる思念はさらに重要な役割を担っているとキングは考える。キングはその役割について次のように述べている。

私たちはそれゆえにそれらの事柄が神の属性とされた時には、私たちが神から何を期待すべきなのかということや神に課せられた義務が何であるのかを私たちが考えることを助けるために私たちの能力に謙る方法をとっているの

だと解釈するべきである。そして特に予知、予定そして知性や意思という名辞は神の属性とされた時には、厳密なあるいは固有なものとしてとられるべきでなく、それらが私たちにおいてあるのと同じ様式であるいは同じ意味で私たちはそれらを考えるべきではない。反対に私たちはそれらを類比や例えという方法で解釈するべきである。（『予定と予知』6節）

聖書における「類比や例え」は「私たちが神から何を期待すべきなのか」あるいは「神に課せられた義務は何であるのか」を理解することを助けるとされる。このようなキングの態度は、バーマンがキングに与えた呼称である「アイルランドのプラグマティスト」に相応しい¹¹。なぜなら人間は神の属性をまったく知ることとはできないとしつつも聖書における「類比や例え」によって人間は自身の行動をどのように制御すべきかを知ることができるとキングは考えているからである。

ところで神の属性が人間にはまったく理解できないとして、人間の属性と神の属性を「同じ様式であるいは同じ意味で」捉えることができないとは、具体的にはどのようなことを意味しているのだろうか。神の予知をめぐってキングは次のように述べている。

しかしこの[予知を類比によって表現する]ことから、手あるいは眼や慈悲、愛あるいは憎悪と同様に、私たちの内にあるのと同じ様式にしたがって、適切にそして文字通りにそれらが神の内にあることにはならない。反対に、私たちがそれらの名前前で呼び、神に帰属させるときにはそれらの事柄は私たちの内にあるのとまったく異なった本性であることを認めなければならない。...<中略>...私たちは、私たちの手が指と関節から構成されていることから神の力能がそのような部分に区別されると私たちが結論付けることができないのと同様に、一方の真の本性から他の真の本性を帰結することには理性的の正当性がない。（『予定と予知』6節）

先述したように聖書において神の属性は人間の属性を表す言葉を類比として用いることによって記述される。しかしこのことは同じ言葉を用いられる神の属性と人間の属性が同じ本性をもつことを意味しない。なぜならそもそも神の属性がどのようなものであるかを人間は理解できないからである。そして同じ本性をもっていないことは、『予定と予知』6節の「神の手」の例が示すように、「一方の真の本性から他方の真の本性を帰結すること」ができないことを意味する。

これまでみてきたように『予定と予知』ではキングの神学の中核的な概念である類比が提示されている。これまで概観してきたことを踏まえて、類比を提示するキングがどのような立場を採っているのかをまとめておこう。キングは神学的な考察の大前提として

キングの立場Ⅰ：神の属性を人間はまったく知ることができない

を採る。そしてキングの立場Ⅰを基盤として、次の

キングの立場Ⅱ：人間の属性の本性から神の属性の本性を帰結することはできない

を採っている。

このようなふたつの立場からキングは神の予定や予知が人間の自由意志と整合することを示すことを試みる。キング自身も認めるが¹²、確かに人間の属性としての予定や予知は人間の自由意志と整合しない。そうであれば神の予定と予知が人間の予定と予知と同じものであれば、神の予定と予知は人間の自由と整合しない。しかし、キングの立場Ⅰに基づけば、神の属性としての予定や予知がそもそもそれ自体でそのようなものであるかを人間はまったく理解することができず神の予定や予知と同じであると考えすることはできない。またそのキングの立場Ⅰを基盤としたキングの立場Ⅱに基づけば、人間の属性としての予定や予知が人間の自由意思と整合しないという本性をもっていたとしても、その本性を神の属性である神の予定や予知に帰結させることはできない。そうであるとすれば、神の予定や予知は人間の自由意志と整合すると考えることができるとキングは主張する。

3. パークリによるキングの批判

本節では前節で概観したキングの立場に対して、パークリがどのような観点から批判をしているのかをみていくことにしよう。パーシバル宛書簡でパークリは次のようにキングの立場を批判する。

私はダブリンの大主教の神の予知に関わる説教の権威を自身の裏づけとして、神に足や手が無いように知恵、善性あるいは知性があることを否定し、それらの事柄は象徴的な（figurative）意味にとられるべきだという人々と出会い

ました...<中略>...そして驚いたことに彼 [ダブリンの大主教] の恩寵がその奇妙な教説を主張していることを発見しました。しかしそのような原理の下では、私は告白しなければなりません、どのようにして神の存在を証明することが可能なかが私にはわかりません。私の知っている神の存在のための議論で、同時にそれらの言葉の厳密で、文字通りでそして適切な意味において神が知性を持ち、知恵を持ちそして慈愛に満ちた存在であることを証明しないものはありません。(Berkeley, vol. 8, 32)

パーシバル宛書簡ではキングの立場がふたつの点から批判されている。第一の批判は、神の属性を表す「知恵、善性あるいは知性」が「象徴的な意味」にとられるべきでないといわれていることである。そして第二の批判は、最初に批判されたように、キングが「知恵、善性あるいは知性」を「象徴的な意味」で理解するならば、本来は神の存在と「言葉の厳密で、文字通りでそして適切な意味において神が知性を持ち、知恵を持ちそして慈愛に満ちた存在であること」を同時に証明する神の存在証明が不可能になるということである。これらふたつの批判の内実を順にみていくことにしよう。

第一の批判は奇妙な点をもっている。それはキングが『予定と予知』で類比という概念を提示しているのにもかかわらず、バークリがそれを「象徴的」という言葉に置き換えて批判している点である。このことからこの批判にはバークリによるキングの立場の解釈に基づいていると考えられる。バークリによるキングの立場の解釈を明確にするために、まずバークリが「象徴的な」という言葉にどのような意味付けを与えているのかを確認してみよう。

ユーフレイナー：それゆえに私たちは、諒解する、想う、反省する、論議するなどといった象徴的な文体で精神を語り、心の働きを比喩や可感的な事物から借りた名辞で表現します。そしてそれゆえにそれらの知的な事柄を視覚的に描く寓喩は心想事成されます。(Berkeley, vol. 3, 306)

1732年に出版された『アルシフロン』でバークリの代弁者であるユーフレイナーは精神について語る際に使用される「象徴的な文体」について言及する。その際に「象徴的な文体」は「比喩」と「可感的な事物から借りた名辞」を用いた表現と同一視されている。

『アルシフロン』で「象徴的な文体」と同一視された「比喩」について 1709

年に出版された『視覚新論』でパークリは次のように述べている。

しかし彼〔現在目がみえず、生まれてからずっとそうであった人〕対象の位置にかんする判断はどのようなものであれ触覚によって知覚される対象のみに限定される。…＜中略＞…おそらく彼は比喩という方法で高い思想や低い思想について語るかもしれない。（『視覚新論』94節）

『視覚新論』94節では生来目の見えない人が「対象の位置」についての言葉をどのように使用するかが考察されている。この考察において生来目の見えない人が思想に「高い」や「低い」という言葉を使用する場合にはその言葉は「比喩」として用いられているとされる。生来目の見えない人の「対象の位置にかんする判断はどのようなものであれ触覚によって知覚される対象のみに限定される」とされていることから考えて、「比喩」は触覚的な対象という可感的な事物から借りた名辞を用いた表現であると考えることができる。このことから考えて、パークリにとって「象徴的な」とは可感的な事物から借りた名辞を用いることであるといえる。

キングが『予定と予知』で示した類比という概念を可感的な事物から借りた名辞を用いるという意味での「象徴的な」という言葉で解釈することはキングの意図からまったく外れたことではない。キングは『予定と予知』で類比について次のように述べている。

(3.)もし私たちが聖書を調べてみて、そこで与えられている神や彼の属性の表示を考察してみれば、それらは同じ本性を持ち、私たちの感官によって熟知している事柄への類似からわかりやすく借りていることを見出すだろう。それゆえに聖書が神について語る時には手そして眼そして足を神に帰する。（『予定と予知』5節）

『予定と予知』5節では聖書における「神の手そして眼そして足」について言及されている。キングに拠れば、聖書のそれらにかんする記述は「感官によって熟知している事柄」についての言葉を「借りて」表現されている。キングが「手そして眼そして足」を他の神の属性と同列に類比によって聖書で記述されていると考えていることをふまえれば、パークリがキングの類比を可感的な事物から借りた名辞による表現であると「象徴的な」という術語を使用して捉えなおしたこと

には一定の正当性がある。

ではバークリは「象徴的な」言語の使用をどのような性格のものとして捉えているのだろうか。決定論と人間の自由という問題を巡って、『原理論』でバークリは次のように述べている。

しかし心の本性や働きについての論争や誤りに人々を携わらせることにそれらの事柄を可感的事物から借りた名辞で話すことに慣れることよりも貢献する何者もないと思われる。（『原理論』144節）

『原理論』144節では、バークリが誤謬と考える、人間の自由の予知を認めない決定論が検討の対象となっている。『原理論』144節ではそのような誤謬に人々が陥る要因として「可感的事物から借りた名辞で話すことに慣れること」が挙げられている。「象徴的な」言葉の使用の評価という観点から考えると、「象徴的な」言葉の使用は必ず誤謬に陥ると糾弾されているのではないが、誤謬に陥る可能性があることが示されている。このことを踏まえると、パーシバル宛書簡でバークリがキングの類比を「象徴的な」言葉の使用と捉えなおして、第一の批判を提示した理由が明らかになる。神の属性あるいは神の存在をキングが行ったように「象徴的な」言語の使用に基づいて展開することは誤謬の可能性を含んでおり批判されるべきであるとバークリは考え、その考えに基づきキングを批判したと考えることができる。

では次にパーシバル宛書簡での第二の批判の内実とはどのようなものなのだろうか。第一の批判の内実から考えて、「象徴的な」言語の使用を基盤とすることは神の存在証明に誤謬の可能性を忍び込ませることであるといえる。このことはキングのような立場を採った場合に神の存在証明が不可能になるという第二の批判に一定の正当性を与える。

しかし第二の批判はバークリの神の存在証明の特徴を考察する場合に、さらに注目すべき内実を含んでいる。それは第二の批判においてバークリが神の存在証明は神の存在と「言葉の厳密で、文字通りでそして適切な意味において神が知性を持ち、知恵を持ちそして慈愛に満ちた存在であること」を同時に証明しなければならないと考えている点である。

当然のことながら、神の存在証明の目標は神の存在を証明することにある。ところがバークリは神が「言葉の厳密で、文字通りでそして適切な意味において神が知性を持ち、知恵を持ちそして慈愛に満ちた存在であること」を証明するとい

うさらに高い目標を神の存在証明に与える。ではバークリはなぜ神の存在証明にこのさらに高い目標を与えるのだろうか。『アルシフロン』「第四対話」でバークリと立場を異にする対話者の一人であるリュシ阿斯は神の存在証明について次のように述べている。

リュシ阿斯：さて私たちはこのはっきりとしない意味で神が存在することをあなたに認めます。あなたがこの同意をどのように利用できるかを私は喜んで知りたいです。あなたは不知の属性、あるいは同じことですが不知の意味でとらえられている属性をもとに議論をすることはできません。あなたは神が神の善性のために愛されるべきであり、神の正義のために恐れられるべきであり、あるいは神の知識のために尊敬されるべきことを証明することができません。(Berkeley, vol. 2, 70)

この箇所ではリュシ阿斯は仮に神の存在を認めたとしても、「不知の属性、あるいは同じことですが不知の意味でとらえられている属性をもとに議論をする」のであれば存在が証明された神は人間の行動の基準とはならないと主張する。この主張はキングの立場を採れば人間の行動の基準を見出すという役割が果たされないというキングの立場が含む不十分さが示唆している。そしてさらにこの主張が対話者であるリュシ阿斯によってなされたことを考えるとキングの立場が神の存在証明に対する攻撃に利用される危険性があることも同時にこの主張では示されている。つまりそれが含む不十分さと神の存在証明に対する攻撃に利用される可能性からバークリはキングの立場を批判したと考えることができる。そしてこのキングの立場を利用した神の存在証明への攻撃を跳ね除けるために、神の存在証明にさらに高い目標をバークリは与えたといえる。

4. 結論

前節で考察したキングへの二つの批判の内実は、バークリの神の存在証明の特徴を浮き彫りにする。『アルシフロン』「第四対話」でのリュシ阿斯の発言が示すようなキングの立場からの神の存在証明への攻撃を跳ね除けるためには、神の存在証明において神は人間に理解できる意味で一定の神の属性をもつことが示されなければならない。このように考えることはキングの立場 I をバークリが破棄することを示している。

またキングの立場 I を破棄することは、パークリがキングの立場 II を採れないことも意味する。逆にいえば、パークリは人間の精神本性と神の精神の本性の同等性を確保する必要があるということになる。『原理論』や『アルシフロン』で展開される神の存在証明では人間の行為とその結果と神の行為とその結果の同等性から神の存在は証明されている。行為の結果が観念ということを考えると、その同等性は精神と観念の必然的な関係を示す「esse is percipi」原理が担うことが予想される。このように考えることは、「esse is percipi」原理のもつ内実を捉える際の新たな視角を提供することになる。

¹ 傍点を付した語は原文でイタリック体の部分である。丸傍点を付した箇所は原文の文中で大文字に始まる語である。その語が更にイタリック体であるときも丸傍点を付すのみとした。[] および () 内は著者による挿入である。パークリについての引用は (Berkeley (1948-1957)) を用いて著者が訳出したものを使用した。またキングについての引用は King を用いて著者が訳出したものを使用した。

² (Berman (2004), 123).

³ (Cristopher, 11).

⁴ (Berman (2009), 83-98).

⁵ (Berman (2009), 80).

⁶ (Berman (2009), 90).

⁷ (Berman (2009), 98).

⁸ パークリがトリニティ・カレッジ・ダブリンに入学した 1690 年にはブラウンは学長を務めていた。両者の関係は学長と学生の関係に留まらず、1683 年にウィリアム・モリニューが設立したダブリン哲学協会 (Dublin Philosophical Society) の会合で議論を交わす間柄であった。この会合にはキングも顔を出していた。パークリとキングの密接な関係は『視覚新論』第二版の「付録」がキングの質問に由来することからも知られる。(Berman (1996), 11) や (Berkeley, vol. 8, 31) を参照。

⁹ (Beckett, 425-438).

¹⁰ (Beckett, 431).

¹¹ (Berman (2004), 123).

¹² 『予定と予知』7 節

[参考文献]

Berkeley, George. *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*. Thomas Nelson and Sons, 1948-1957.

Berman, David. *George Berkeley: Idealism and the Man*. Clarendon Press, 1994.

—. “The Irish Pragmatist.” in *Archbishop William King and the Anglican Irish context, 1688-1729*. edited by Fauske, Christopher. J. Four Court Press, 2004.

—. *Berkeley and Irish Philosophy*. 2nd, Continuum, 2009.

Beckett, J. C. “Literature in English, 1691-1800.” in *A New History of Ireland. 4, Eighteenth-century Ireland 1691-1800. Vol. 4*. edited by Moody, T. W. Oxford University Press, 2009.

Fauske, Chris. J. “The Angel of St Patrick’s is now Guardian of Kingdum.” in *Archbishop William King and the Anglican Irish context, 1688-1729*. edited by Fauske, Christopher, J. Four Court Press, 2004.

King, William. “Divine Predestination and Fore-knowledge, Consistent with The Freedom of Man’s Will.” in *The Irish Enlightenment and Counter-Enlightenment. Vol. 1* edited by Berman, David. and O’Riordan, Patricia. Ganesha Publishing, 2002.